

あなたは死を宣告されたことはありますか？ 先月号の続きで、前回のあらましはこうだ。

2002年11月から翌年7月まで、中国広東省で急速に呼吸障害を示すSARSが発生するなか、アメリカの砂漠地帯に出かけた。帰国前日から咳、熱、だるさが現れ、ホウノテイで成田に到着。飛行場の医務室で診療を受けるが「風邪でしょ」と診断され、北海道の自宅に帰る。その後、9月に人間ドックを受け、右肺全体に影があると言われ、専門医の受診を勧められた。03年10月21日、札幌市南1条病院（現在の南3条病院）の診察室でCT画像に映る3cmの腫瘍を見て「現在のこの状況は5年で50%、10年で10%の生存率です」と告げられたのだ。

私は突然の訳のわからない数字に理解ができなかった。死の宣告騒ぎの翌年にTVで放送された山崎豊子原作の『白い巨塔』で、里見教授（江口洋介）が病に倒れる財前教授（唐沢寿明）に聞いた「今はどう思う？」という問いに、数秒後に発せられた言葉を、私は心の中で同じタイミングで「無念だ」とつぶやいた。

とりあえず、すぐには死なないが絶対的に死を指定されると、やはり落ち込むというよりも周りのこと

を考えてしまう。1歳の子供は私のことを覚えていてくれるだろうか。もし死んじゃったら、家族の生活はどうなるのか――。

家に帰り、隣に住む親に一応報告しておこうと夜に訪れた。親には「肺ガンだ。寿命は……年」と伝えた。親は黙って聞いていた。いつも口うるさい母親は何も言わなかった。普段から一行以上話さない父親は、「親より先に死ぬなよ」と静かに言った。医師からは何か腫瘍があると言われたものの、実際に検査するまでに3週間くらいあった。

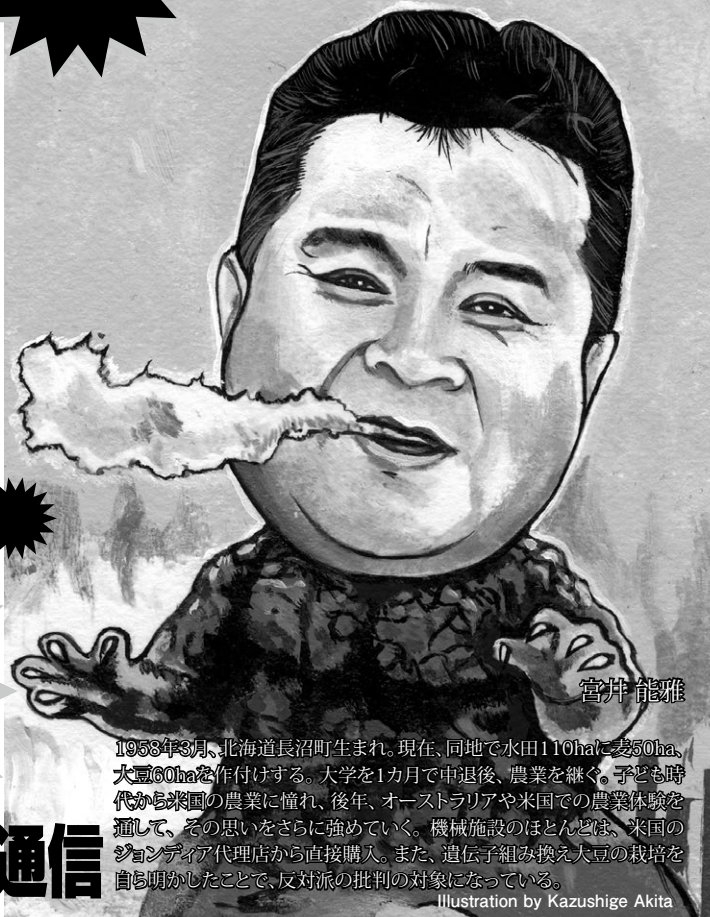
## ロシア原産の魔法の薬

では、あの3cmの物は何なのか？ 翌11月21日に口から器具を挿入され、直接右肺にプスプスと差し込まれて生体検査を受けたが、腫瘍ではなく炎症だという。

そこで何か少しでも改善する方法はないか考えた。その当時、巷で流行っていた魔法の薬が「カバノアナタケ」なる物だ。多く

## 死の宣告をされたこと ありますか?(2)

Vol.143



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物にする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

るか。オレは3期だから、あと何年」「俺は末期で脳に転移があるから、半年持つかなく」、そんななかには放り込まれた。死を淡々と受け入れようとしている姿に驚いた。周りから「あなたはどのくらい悪いの?」と聞かれたが、生検前検査で肺がんではないと言われ、では何なんだ?状態だったので、「皆さんと違って肺がんではありません」「検査結果待ちです」と空気を読んだと思う。

一日に一回、入院患者に対して回診がある。隣の部屋に先生が来ると、みんながベットの横に置いてある「茶色の飲み物」を見えないように隠し始めた。全員が同じ行動を取る。回診が終わる、「何を飲んでるのですか?」と聞いた。みんな「カバノアナタケ」と答えた。魔法の薬治療なので、医者から何か言われるのを気にしていたようだ。

2日目の回診の時、患者の一人がそのカバノアナタケをテーブルに置き忘れたところに医者が来てしまった。急いで魔法の薬を隠すべく容器を落としそうになった様子をみんながヒヤヒヤもので見ていた。ただ医者「カバノアナタケでしょ」とだけ言い、それ以上の責を求めなかった。今まで南1条病院の○田先生と書

いたが、ここでははつきりとお伝えしよう。この藤田先生はすごいと思っただ。平日は出張を含め診察に追われ、私が入院していた日曜日でも夕方遅く、私服で回診していたのだ。肺がんの理由の一つにタバコがある。入院していた一階の小部屋に愛煙家が集まり、思いっきりスーハー、スーハーやっていた。そのなかには入院患者もいた。あゝタバコは死んでもやめられないんだな、まあそれも死を待つ人たちには至極のひとときのだろう。

余談だが当時、北海道に来るロシア人船員が密輸でトカレフ(拳銃)を持ち込むという報道をよく聞いた。その後、需要と供給の関係から、中身はトカレフからロシア原産のカバノアナタケに変わった。北海道産もあつたが、やはりロシア産が人気があり、同じ密輸であってもカバノアナタケのほうが安全・安心だ。

### 砂漠地帯の変わった病気

その後の診察で藤田先生が、「最近どこかで肺のレントゲン取ったかな?」となり、半年前に受けた航空身体検査のレントゲンを思い出した。春に受けたそのレントゲン画像を、カクカクシカジカの理由で欲しい旨を伝えたとこ、病院の縦の系列は強く、航空身体検査医は「あの

病院のアレは私の卒業したアレだから」と、快く受け取ることができた。数日後、南1条病院を訪れて半年前のレントゲン画像を渡すと、藤田先生は持ち込んだ画像と現在の画像をのぞき込んだ。「4月の時点ではそんなにひどくないね。その後、炎症ができたのかな」となった。以前の診察時に「動物飼ってる?」と聞かれたが、「いません」と答えた。「んーん、海外は?」となり、「毎年アメリカに行きます」「どんなとこ?」「えー内陸の砂漠地帯です」と話すと、藤田先生は「そう言えば砂漠に変わった病気があつたな」と言い残して、その日はそれで終了。自宅に帰り、ネットに条件を入れてみたら、ありました。

コクシジオイデス症、南北アメリカ砂漠地帯の砂にある真菌で肉芽腫を引き起こす。アメリカではバレーフィーバー(溪谷熱)と呼ばれる。医学専門書によると、コクシ(通称)が強風や土木工事で舞い上がり分生子(真菌胞子?)を吸い込み肺に感染を起こす。患者の0.5%は全身感染に波及し、その半数が致死的となる。本

菌の検査では二次感染に注意が必要で、アメリカでは過去200名近い研究者および臨床検査技師が感染し、死亡例も少なくない。日本では

02年9月までに31例の報告(私は含まれない)があり、そのうちの2例は渡航歴がない綿花を扱う工場の従業員が感染したとある。これらの地域の女性の30~60%は生涯どこかでこの真菌にさらされている。アメリカでは毎年15万人がこの感染症にかかり、白人よりも黒人よりもアジアの方が症状を出やすいと記憶している。

次の診察で、藤田先生は「もしこのバレーフィーバーだったら、北海道では調べようがないね」と言われた。なんでも当時の横浜の国立感染ナントカに生検を送ることになると言われた。そこで先生から「またアメリカに行く?」と言われ、「2カ月後に行きます」と伝えたとこ、CTの画像5枚と現地の病院での検査を勧められ、そうすることにした。

話は変わるが最近、濃厚接触は2m以内というが、CDC(米国疾病対策センター)では6フィート(1.83m)とある。この17cmの違いは?まさかマイナス17cm入れたり出したりする濃厚接触行為のことを示しているのだろうか……。

再度聞こう。あなたは死を宣告されたことはありませんか? ポーと生きてんじゃないぞ。後悔のない人生を送りたいものです。(続く)